9-2		主題	祝！ミトンが外れた日	
身体拘束		副題	度重なる胃ろう抜去と身体拘束	
モチベーション			～長期化した身体拘束の解除に向けて～	
研究期間	10ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム マイライフ徳丸	
発表者：畑中 幸子			アドバイザー：	
共同研究者：山内 美紀子、大井 智子				
電話	03-3933-0039	メール	mylife-j@pure.ocn.ne.jp	
FAX	03-5921-1003	URL	http://www14.ocn.ne.jp/~mylife/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成 15 年開設 特養・ショート・デイサービス・ケアプランセンター・ヘルパーステーション・グループホーム・地域包括支援センターの複合施設です。高齢者介護サービスを通じて、地域社会に「安心」「安全」「幸せ」の輪を広げることが法人の使命とし、利用者様から信頼のされる「質の高いサービス」が提供できるよう、外部・内部研修への参加を積極的に行っています。
------------------	--

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>○研究前の状況</p> <p>平成 18 年に「身体拘束ゼロ」宣言を行い、身体拘束解除について、施設全体で取り組むようになった。3 年間使用していた車椅子の安全ベルトを解除するなどの成果も見られ、施設としても、「身体拘束は解除出来る！」という自信を持ち始めていた。しかし、過去 3 回、胃ろう抜去という事故のあった A さん（ミトン歴 3 年）については、事故が、本人の生命的危機に直結することから、職員の間では、「ミトンは外せない」という意識が強かった。そのため、身体拘束解除に向けての実践がなかなか進まず、身体拘束が長期化しつつあった。</p> <p>○研究の課題</p> <p>手順・マニュアルだけでは乗り越えることのできない、家族・職員の精神的不安を理解し、現場職員の取り組みを組織として支援する体制が必要であった。</p>
--

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>○研究の目標</p> <p>ミトンを外すことについて不安を感じている家族・職員の理解を得るために、安全な方法・安心できる環境を検証し、実践に結びつける。</p> <p>○期待する成果</p> <p>① 身体拘束の解除という取り組みについて、家族と共に歩むことで、家族との信頼をより深める。（＝法人理念の具現化）</p> <p>② 身体拘束解除に向けて、職員のモチベーションを高める。</p>
--

《具体的な取り組みの内容》

8/17 居室移動（見守りのしやすい部屋へ移動）

11/4～日中の臥床時間にミトンを解除

12月上旬～1月中旬

患側の手（ミトンをしていない方）に水疱ができてしまい、ミトン解除を一旦中止する。

1/15 ケアプラン更新のため、ミトン解除に向けて計画を立案。家族に相談、了解を得る。

1/31 介護職員へのアンケート作成
職員が不安に感じている点を抽出し、以下の対応を行う。

- ① 事故発生時の対応のマニュアル
- ② ミトン使用する場合のルール作り
- ③ 必要物品の準備。保管場所の確保

2/10 家族へ経過説明、夜間のミトン解除の開始について了解を得る。

2/22 夜間のミトン解除開始。同時に、看護師より、胃ろう抜去時の対応について、個別のレクチャーを開始する（対象：夜勤に入る職員全員）。

以後、2週間後である3/8、1ヶ月後の3/24、2ヶ月後となる4/25に評価・見直しを行った。

5/20 胃ろう抜去。マニュアルに沿って、対応と連絡を行う。

《取り組みの結果と評価》

- アンケートを行うことによって、家族・フロア職員の不安な点が明確になった。
- 『不安＝解決すべき課題』として理解することで、具体的な対策を立てることができた。
- その結果、家族・フロア職員の理解と協力を得た上で、ミトン解除に結びついた。
- 他職種との連携を大切にした。そのことがチームケアに結びつき、サービスに自信が持てるようになった。
- 家族への情報提供や相談をこまめに行い、よき理解者になっていただいた。
- 胃ろう抜去の事故が発生したとき、あわてずに対応できた（担当職員より）

《まとめ》

身体拘束を行う場合、緊急性・生命的危機・非代替性という条件が求められる。そのため、一度拘束を開始すると、解除に踏み切ることが困難になる。今回の研究は、拘束をしないための工夫ではなく、解除に踏み切るプロセスに着目したという点で、実に有意義だったと感じている。

研究を終えて、一番嬉しかったことは、ミトンの解除について理解し、応援して下さるご家族がいること、そして、ミトンの解除という困難に立ち向かえる、情熱をもった施設だと実証できたことである。

《提案と発信》

身体拘束は『人権侵害の行為』といわれていますが、その人の生命を守るためにやむを得ず行う場合があります。『人権侵害』と『生命的危険の回避』について、時としてその境界線に悩むこともあるのではないのでしょうか？しかし、そのような悩み・迷いがあるこそ、介護の技術とその心が熟成され、利用者本位のサービスにつながると考えています。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。